

## 古河に大きなお城と町割りを築いた土井利勝

江戸幕府最初の老土井利勝は、徳川家康・秀忠・家光3代の将軍に仕えた幕府の草創期の実力者です。その利勝が古河の歴史に登場するのは、3代将軍徳川家光によって古河藩主を命じられた1633(寛永10)年のこと。古河の歴史上最大、16万2千石を治めることとなります。

藩主としての利勝は、桃林だけでなく、城や城下町の整備をしました。現在の古河駅西口に広がる街並みは、利勝による町割りや礎となっています。また、この時建てられた古河城御三階櫓は、土塁の下から合わせると約30mの高さを誇る大建築物として城下のシンボルとなりました。



▲土井利勝肖像画(正定寺所蔵)

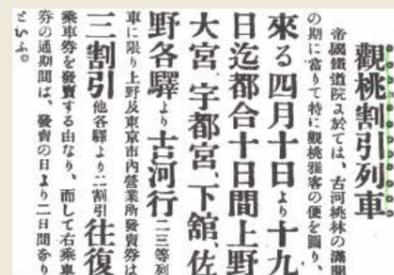
## 明治時代は観桃会～古河のお花見は桃、お土産も桃～

明治時代になると、まち全体で桃を観光資源とする運動が起ります。古河実業協会という団体が中心となって観桃会を開き、上野を初めとする近隣各駅からの鉄道料金の割引を実現させ、さまざまなイベントを開催することで、多くの人たちを楽しませました。

また、当時の新聞広告を見ると、観桃会の来場者用に、桃よかんや缶詰などのスイーツが、お土産として開発されていたことが分かります。



▲当時のお土産の広告



▲観桃割引列車が掲載された明治時代の新聞



「原町口より古河城下真景図」  
日光道中と古河宿南端にあたる原町口(古河台町郵便局付近)を描く絵図。松並木の両側に低木の桃林と古河城(左奥)が描かれています。  
古河歴史博物館所蔵 国重要文化財

## 江戸時代から古河に残る桃林の歴史 ～領地の民を想う藩主の知恵～

なぜ、古河にこれほど多くの桃の木があるのかご存じですか。その起源をたどっていくと、江戸時代に古河藩主となった老土井利勝の知恵が見えてきました。今回は、利勝が仕えた徳川家康とその側近の仕事や功績などが収められている『落穂集』に書かれた利勝と古河の桃の話を紹介していきます。

### 利勝が広めた桃

1633(寛永10)年に古河藩主となった土井利勝は、藩内および領内の村々において燃料として使う薪が不足しているという状況を聞き、領内の子どもたちに桃の実を拾わせるように命じました。

こうして集められた桃の実は、ひと夏のうちに数十万個になったといわれています。その後、桃の種を領内の畑や野原、屋敷周りに植えて育てるように奨励しました。「桃栗三年」の言葉どおり、短期間で成長する桃は領民の食料だけでなく、枯木を薪として使えたので、薪の手配に困ることが無くなったといわれています。

江戸初期の古河では、限りある資源を効率的に利用する循環型社会のような仕組みが実現していたのかもしれない。

### 古河が誇る観光の名所に

こうして古河のまちに定着した桃林は、明治時代以降はその美しい花が鑑賞の対象となりました。桃の花が咲く時期には、東京から「観桃割引列車」が毎年のように運行されるなど、遠方からも多くの人が観光に訪れるようになります。

江戸時代に食料や燃料として植えた桃の木が、いつしか古河が誇る観光資源となり、令和となった現在においても、市民の誇りとして愛され続けています。

## 昭和初期に作成された「茨城県古河町案内」絵はがき ～当時の人がまちの誇りとして描いた桃源郷～

大正時代になると多くの桃が枯死してしまいます。昭和初期に発行されたこの絵葉書は、古河のまちを空から望んだものです。古河の南半分が桃色で着色されているのは、桃源郷のようなかつての桃林をしのぶものとなっています。

江戸時代から幾度となく、再興されてきた古河の桃は、1975(昭和50)年の古河総合公園の開園に合わせ、新たにハナモモが植林され、市民の誇りとして現代に引き継がれました。

